

低湿地村落における稲作儀礼の研究

— 新潟県西蒲原郡遠藤の事例から —

山田 祐紀

Abstract

In this paper, from the perspective of clarifying the aspect of rice cultivation rituals surrounding the Ta-no-kami, I would like to clarify what is on the minds of those who receive the benefits from the lagoon and the disaster in the village society of low wetland.

There have been few detailed reports on the rice cultivation ritual in this area, and the impression that the consciousness of the ritual and faith has thinned out has taken root.

However, in fact, it has become clear that faith of the itinerant nature of the Ta-no-kami and the accompanying rice cultivation ceremony has existed in this area strongly.

First, in the ritual ceremony surrounding the Ta-no-kami in the Endo village, the community relies on Mizu-mochi-aze (ridges of mud), which features rice cultivation in this area and the willow of the deep involvement.

Second, the Ta-no-kami in Endo clearly has an itinerant personality, and it is that the tradition that it comes from the Yama who points around the common area is revealed. The people of Endo believe that the Ta-no-kami is close to them, and we can see the strong faith that they prayed for a good harvest of the year.

キーワード……稲作儀礼 低湿地 田の神 ミズモチアゼ ヤナギ

1 序論—問題意識と分析視角—

(1) 恩恵と災厄を受容する低湿地村落

山と海をつなぐ水系の下流に位置する潟周辺に暮らす人々は、そこから恩恵を受ける一方、様々な災厄とつきあってきた。

本稿の対象地は、新潟県西蒲原の鎧潟周辺の低湿地帯である。この鎧潟の潟縁に位置した遠藤集落の人々は、潟縁を開墾し、水田を造成してその生活を成り立たせてきた。従来、低湿地原野特に新潟県西蒲原平野では、歴史資料や伝承、民具からその開墾と農耕の様相が¹⁾つぶさに明らかにされてきた²⁾。該当する研究ではヤチやノマ、ホリアゲ田やウネ田、舟運や用排水の問題など、今日では見られないような技術が目立つが、その一方で、こうした土地に暮らす

人々の心的側面については、まとまった記録や伝承が少ないこともあって、あまり関心が払われてこなかった傾向がある。

ここで考察したいのは、恩恵と災厄が隣り合う低湿地の生活の中で、そこに暮らす人々がいかにしてそれらを受けとめてきたのかということである。特にその中で田の神をめぐる稲作儀礼が持つ意味やそこから透ける人々の心性を検討したい。

（2）稲作儀礼研究の展開

稲作儀礼とは、「水稻の栽培過程の区切りごとに行われる諸儀礼の総称」であり、現行の稲作儀礼は「予祝儀礼・播種儀礼・田植え儀礼・成育儀礼・収穫儀礼の五つの儀礼群から構成されて」（福田ほか 1999:115）いる。

民俗学における稲作儀礼の研究は、「他の分野とくらべて、相対的に研究の進んだ部門」（伊藤 1974:23）とされるが、その研究史を概観するにあたっては、民俗学の祖・柳田國男の指摘を無視することはできまい。

柳田はその論考「稲の産屋」において、正月の年俵や奥能登地方で伝承されるアエノコトに着目し、ニイナメ儀礼が穀霊信仰に根差したものであり、種粃における生命の継続儀礼が重要な内容の一つではなかったかと提唱する。柳田による説明は、農耕儀礼の中で登場する田の神像の性格を、今日におけるまで多くの研究者に植え付けたものと言ってよかろう。また柳田は、山の神と田の神の交替・去来について、彼の関心であった祖霊と重ね合わせて理解している。山は祖先神が留まる他界と説明し、それゆえ山の神は田の神と同一神であるとの認識である。

その後の日本民俗学において、田の神は「稲作の豊穰を祈り祭る神」（柳田 1951:357）「稲を守り稲作の豊穰をもたらす神」（大塚民俗学会編 1972:433）とされているように、稲の外にある農神として認識されてきた。

その中で、藤原修は、能登半島一帯で行われるアエノコトを事例に、従来の田の神と山の神の交替伝承ではなく、田の神の表象に注目して、田の神の本質的性格を稲自身のスピリットとでもいべき稲の神（穀霊）に求める「田の神転換の論理」と称した独自の解釈を行っている。この論理は、稲作の秋から春に継承される種粃に表れる農業の再生産構造に支えられ、稲の神（穀霊）が歴史的習合の所産により新たな田の神として成立し、さまざまなバリエーションを示すとしたものである。つまり、藤原は地域で「田の神」として一括されている存在の性格にはさまざまなものが複合されており、それらが越冬期間に転換すると解釈したのである（藤原 1996:41-192）。

野本が指摘するように、「わが国の民俗文化の骨格が、水田稲作農業を基盤として生成されてきた」ことや「日本民俗学が、民俗研究の基本に稲作を据えてきた」（野本 1993:3）ことは確かであり、それゆえ稲作儀礼の研究は上記で概観したもの以外にも、その視点や研究方法において多様な研究がある。

しかしながら、本稿の目的・関心においてこれらから指摘できる重要なことは、従来、稲作儀礼のあり方は乾田のそれが主流となり、その他の耕作形態間の相違はあまり想定されてこなかったことである。その点に注目した数少ない研究として、柳田や折口らも関心を示した南島の稲作儀礼について、本土と沖縄の稲作儀礼を「差異の追求という視点」（伊藤 1974:7）から比較研究することに意欲を向けた伊藤幹治のそれが挙げられるが、特に沖縄の稲作儀礼は麦・粟などの畑作物との関わりが深いという分析が出された。

伊藤が指摘した畑作物と稲作儀礼の関わりも実に興味深いのが、我が国の稲作の形態としてまず念頭におかねばならないのは湿田あるいは低湿地という環境である。現在においても、土地改良事業は続けられており、日々その様相は変化している。しかしながら、昭和20年には新潟県の湿田率は県全体で66%を占めたという統計も存在し（農林大臣官房総合開発室 1952）、かつ本稿で扱う稲作儀礼が行われた対象地域や年代は、まさしく低湿地におけるそれなのである。湿田/乾田において田下駄をはじめとする農具や技術からその習俗が異なることは早くから指摘されている。こうした習俗の相違を視野に入れず、乾田やその他耕作形態における儀礼や信仰のあり方をそのまま湿田地帯にも適用できるものと判断してよいのかどうか疑問である。

したがって、次に検討する必要があるのは、湿田/乾田における稲作儀礼に差があるのかどうか、もしあるとすればその差は具体的に何によってもたらされるのかという点である。

この点を明らかにするために、次項では、湿田特有の圃場形態が集約されるアゼについて、その様相と従来のアゼ研究について詳述し、本稿の分析視角を示してゆく。

(3) アゼと低湿地

一般的にアゼとは、「土を盛り上げ、水田の区画を分け所有の最小単位を明示するもの」あるいは「水田稲作にとって特に保水の上で重要な意味を持っており、人や牛馬の通路にもなった細い道」（福田ほか 1999:26）などと定義される。アゼに関する今日までの研究は、その植生、管理技術や農作業の改善、大規模経営や集落営農にまで多岐にわたる。

民俗学におけるアゼ研究に焦点をあてれば、野本寛一による稲作過程と技術伝承での畦の整備方法²⁾や、安室知の複合生業論の中の畦畔栽培³⁾への注目が挙げられる。

しかしながら、これらアゼに関連する研究の中心はやはり乾田地帯のそれであり、低湿地におけるアゼの形態は必ずしも解明されてこなかった。遠藤におけるアゼは乾田地帯のそれとは異なり、様々な種類や役割があり、それは田の神をめぐる稲作儀礼とも深く関わっていた。

遠藤において、アゼは大きく分けて三種類ある。それぞれ、ヌリアゼ（ミズモチアゼ）、クサアゼ、サカイヤナギである。

このうち、ヌリアゼ（ミズモチアゼ）は^{べト}粘土で造られており、これは乾田のアゼのように耕地一筆ごとではなく、比較的良田とされる小字の中に、高地から低地に向かって一定の範囲の土地集団を囲うように、段々に造られた。つまり、ヌリアゼによってより耕地間に高低差が生

み出されたのである。ではなぜ一筆ごとにこの泥土でできたヌリアゼで囲わないのかというと、それには低湿地帯の自然環境が大きく関わっていた。潟縁に位置する遠藤集落では、冬の湛水期に潟の方角から吹く強風と浸水により、泥土で作られたアゼは破壊されやすく、田が潟の水や潟の砂泥であるゴミで全滅してしまうのだという。

こうした被害を抑え、またより細かな耕作地の範囲を設定するために配されたのが、水辺に生えるヨシやガツボ等の植物を利用したクサアゼであった。クサアゼは総称で、これにはヨシやガツボなどが使用され、呼称もヨシアゼ、ガツボアゼ、ヤチアゼ、クロアゼなどさまざまであった。これらクサアゼは、田を開墾したり稲作の作業過程初期にアゼヌリをする際に造ったりするもので、刃の長いヤチキリガマで原野に生える植物に切り込んだり、あるいは植物の根を人工的に絡ませて造ったりする。湛水した場合にも根が張っているので崩れることはなく、最低限の田の境界は維持することができた。またクサアゼには、肥料にしたり田そのものを高くしたりすることに役立つゴミが寄せ集まるという利点もあった。また田作業での移動には、ヌリアゼは壊れやすいため、クサアゼの上を歩いたといい、頻繁に使用するクサアゼは筵で補強するなどの工夫も見られ、各自の耕地間を移動するための貴重な手段でもあった。

そして、最終的に各自の耕作地の最小範囲を設定するために配されたのが、境界標示とされたサカイヤナギである⁴⁾。サカイヤナギとは、ヤナギ⁵⁾の枝を各自の耕作地の境界に挿し、その枝が根を張って目印となるようにしたものである。隣り合う耕作地の境界を示すものはこのヤナギの枝のみであり、移動することも容易で、枝を夜中にこっそりと動かして自分の耕作地の範囲を広げる者もあり、隣り合う耕作者と喧嘩になることもしばしばあったという。

このように、遠藤では異なる機能を持ったヌリアゼやクサアゼ、境界標示であるヤナギが三種類の構造となって存在していたのである。

以上のことをふまえ、本稿では、低湿地の村落において潟から受ける恩恵や災害を受け止める人々の心性を、田の神をめぐる稲作儀礼から検討していく。その際、湿田のアゼの形態に注目することで、湿田における稲作儀礼の特徴を明らかにすることを目指す。第2章では、本稿の対象とする遠藤集落において、その空間構成と稲作の作業過程についてみていく。第3章では当該地域の稲作儀礼について詳述し、第4章で考察を行う。これらをふまえた第5章が、本稿の結論である。

2 遠藤をとりまく環境と生業暦

(1) 「低湿地」という空間

新潟県西蒲原郡遠藤は、稲作を中心とした農村である。2010年時点で135戸、590人の人々が暮らしている。かつては、鎧潟に伴う生業と農業を行う集落であった。鎧潟の東岸の自然堤防上（潟縁）に位置し、標高は0.1～0.7mときわめて低平な低湿地帯であった。潟に近いため

水害に遭うことも多く、新田開発が進むにつれ鎧潟上流部より集まった排水が川に吐き出される際に、川への流入口に位置したために被害を受け、3年に一度は稲が流れてしまう「流れ場」であったという。排水機の導入などにより、年代を経て徐々に水害問題が解決への道を進むことになるが、こうした劣悪な自然条件が、昭和47（1972）年の鎧潟干拓完了まで続いたいわゆる「低湿地⁶⁾」村落であった。

遠藤の昭和期にかけての主要な用水は木山川で、隣の大原村を灌漑した後、遠藤に入った。上流優位の原則のもと、遠藤は余水利用で水不足となることが多く、また遠藤の上流には堰がいくつもあり、堰を塞がれると用水の利用は困難であった。こうした堰を開けてもらうため、近隣の大原集落や番屋集落、今井集落には正月元日に酒や米を持って堰を払って用水を流してくれるよう頼みに行き、再び堰が塞がれると困るので、番人をムラから2人ずつ出して見張りをしたこともあったという⁷⁾。

こうした経緯から、ムラの中で用水不足は深刻な問題であった。それゆえ、昭和20年代まで、小字である大諏訪や小諏訪、上田などの比較的高い位置にある田周辺にヌリアゼを造って天水や近隣の村々から流された微々たる用水を溜め、これを壊すことによって、高低差を利用して1カ所に集められた各イエ所有の苗代田へ水を次々と流した。図1の小字前田の西側には、苗代田が1カ所にまとまっていることが分かる。このことから、遠藤では水を保つために造られたヌリアゼのことをミズモチアゼ（水持ちアゼ）と呼んでいた。つまり遠藤では、苗代水はこのミズモチアゼによって所有者を異にする水田にムラとして共同で貯水され配水されたのである。

また、西蒲原は昭和20年代後半に耕地整理が施工されて以降、1960年代までの食糧増産政策の下で鎧潟の大規模干拓事業が行われ、近代的な土木技術の導入により農耕技術とそれに伴う儀礼の両側面において、古い形態は残りにくくなったと考えられる。そうした中で、遠藤では後述する田の神迎えと苗代祭りの儀礼は見られなくなったものの、その他の行事は近年まで継続されていた。この点も念頭に置きつつ、考察を加えたい。

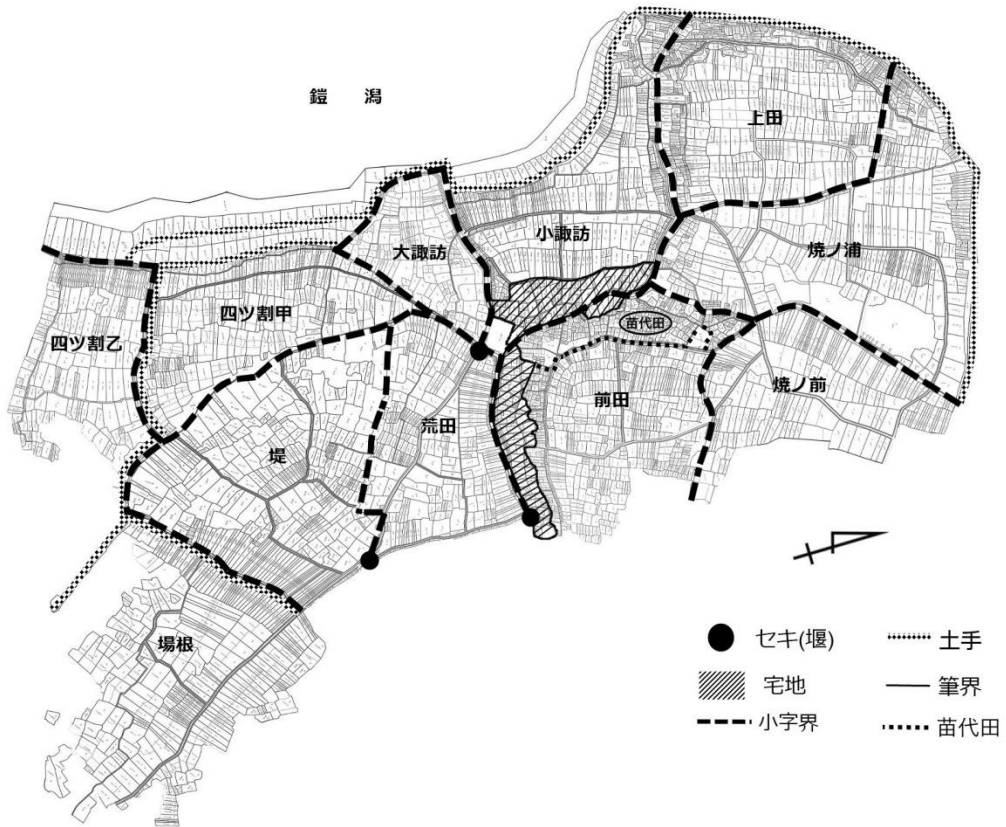


図 1. 遠藤耕地図

(出所) 遠藤区有資料「明治二十五年作製 遠藤全図」よりトレースして筆者作成。

(2) 稲作過程とムラの生活

では次に、低湿地の様相を探るため、より具体的な稲作の諸作業およびその概要について、順に追ってみたい。

遠藤の稲作で最初に行う作業は客土で、土を運び田に入れる作業を指す。これは2月に主に日雇いで行われ、日当をもらったという。舟に土を乗せて運ぶこともあったが、道が凍っていたのでソリで運ぶことが多かった。

客土の次に行われるのはアゼヌリで、これは3月中旬から下旬にかけて、ムラの共同作業で行われた。平鋏を使ったが、泥土が柔らかかったため、それほど骨の折れる作業ではなかったという。アゼヌリをするのは主に苗代か良い田（早くから開いた比較的乾いた田）で、あとの田はヤナギが境であり、アゼヌリをする必要はなかった。ムラのほとんどは湛水地であったの

で、排水には苦勞をした。排水を行っても、度重なる洪水や濁から浸み出す水のせいで、乾田にはほど遠い耕地であった。

このアゼと用水の関係について、遠藤では、用水のない大正時代には、大諏訪や上田などの高い土地の田にアゼを作り、そこに水を溜め、用水を確保していたという。この水を溜めておくためのアゼをミズモチアゼといった。ミズモチアゼはムラ全体で管理し、こうした作業を「アゼをしめる」といった。時期が来るとこのアゼを壊して次々に低い土地（悪田）に水を流していったという。良田のアゼはベトでできていたが、悪田の畦畔は濁から上げたゴミや草でできていたので、ゴミアゼやクサアゼといった。アゼの善し悪しはその年の作付や湛水に影響するため、ムラの存亡をかけるといっても過言ではないほどアゼは重要視されていた。

耕地と用排水の準備に続くのは、種もみ準備である。種もみのことをスジといった。スジは個人で品種が異なるため、各自が乾燥させて保管していた。その方法は、スジをナガキという竹棒に吊るし、家のイロリの上等の乾燥する場所に下げておくものである。スジの乾燥は翌年の収穫に大きく影響するので、かなり気を遣ったという。スジの処理としては、ワラを敷いて床をこしらえ、水に15日程浸けておき、それを天気の良い日に干す。スジ俵の中へスジと湯を入れて蓋を閉め、さらにこのスジ俵を藁クズの中へ入れて芽出しをする。

苗代は、種もみの準備と並行して作られる。個人所有の苗代田が毎年同じ場所に設けられた。苗代押しは、4月下旬から5月上旬にかけて行う。畝を造って、昨年の稲の株をもぐらせてナラシタで平らにし、芽出しをしたスジを蒔いてクンタンを撒き、水をかけた。スジを蒔くのは春祭りである5月1日を目安にするという。この頃にならないと水温が上がらないため、発芽しても定着しにくかった。短冊を作らずに坪に6~7合程をバラ蒔きにしたという。水かけは毎日行い、朝夕の様子を見に行ったという。田へ出す頃になると3~4回下肥を撒いた。

次に本田の田打ち・タコギリ・シロカキという3段階の作業が行われる。田打ちは4月上旬から5月上旬までに行われる。この時の田打ちは特に荒起こしといわれる。ムラの中でも良い田（小諏訪など）は先に打った。苗代の用水とするために、大原村のサゲを利用して（大原で利用した用水を使って）、各家にある古いムシロを使ったムシロゼキをしてそこに水を溜めた。4月10日頃には小諏訪を田打ちにしるとムラからフレが回った。ぶたないでのおくと、苗代の用水を溜めることができないので、作業の遅れている家はチョウチンを点けてブツたという。田打ちは平鍬ないし三本鍬でブツた。平鍬で打つことができるのは一日に2反以上、三本鍬では1反程度だった。前年に流れてしまい稲刈りがされなかった田んぼは、田打ちをしないで古カブツを抜いて埋める「生き埋め植え」をして、そこへ田植えをした（田打ちと田植えが一緒に行われる）。

並行して4月の下旬から5月の上旬まで田ごりが行われる。5月下旬から6月上旬にかけて土を細かくし、田を平らにするためにシロカキを行う。大正10年頃から人が引くマングワで

シロを掻き、昭和初年頃からは牛によるシロカキがはやったという。しかし、実際に牛が入れる田んぼは少なかった。

5月中旬から下旬、8月中旬の2度にわたり、クロキリとはクロに生える雑草を共同作業で刈り取るなどしてアゼの形を整えるクロキリを行う。ここでのクロとはヌリアゼを指す。

6月上旬から中旬にかけてワセ、ナカテ、オクテの順で田植えを行う。田植えはカンジキを履かず、ぬかるんだ田は竹竿2本を田の端から端までわたし、その上を渡って手で植えたという。境界だけは縄を張ってはっきりさせたが、あとは曲がってもそのまま植えた。少数ではあったが、日照りが続いて土が硬くなり植えられなくなった耕地には、豆植キネや天秤棒で土に穴をあけて苗を植えたという。植え方は、縄を張って目安にして2人ずつ入る手植えから定規植、型植へと移行していった。天候により増水するため、苗は1尺3~4寸ほどまで育てて植えた。この苗の大きさでも、増水すると植えた場所が分からなくなるので、目印のためにサイミサシと称してヤナギやヨシ、ガツボを一緒に植えた。1人で植えるには一日に5畝が精一杯であったので、植え手にユイを頼むこともあった。ユイをし合うのは通常、ムラ内ではなく、近隣の横戸や水沢新田などのムラ外のシンセキや親しい者である場合が多かった。これは同じムラ内であれば必ずと田植え時期が重なるためと、遠藤の生産暦が他ムラとは多少時期がずれていたためである。

田植えが終了するとサナブリヤスミとなる。6月5日には節句があるので、この時にサナブリヤスミを兼ねることも多かった。また毎月1日と15日は休みと決まっており、その日にはダングを作って食べた。農閑期や春田には主にカテメシ⁸⁾を、草取りの頃には麦飯を、稲刈りの頃にはカテメシをと、休み日以外はほとんどカテメシを食べていたという。その他の休み（ミズカケ休み、雨降り休み等）はその都度ホラ貝を吹いて触れたという。休みの日は主に畑仕事やニワ仕事を行った。

田植えの後、草採りをイチバグサ、ニバグサ、サンバグサと3回行った。それぞれイチバグサは6月下旬から7月上旬、ニバグサは7月中旬から下旬、サンバグサは8月上旬から8月中旬にかけて行われた。シロカキは12~13日程までかかるので、早くにシロを掻いた田んぼは苗か草か分からない程生えてしまう。日照りが続くと小ガマで草取りをしたこともあった。あまりに土が硬く、水もなければナカサイブチといって三本鍬でブツから採ることもあったという。盆の13日頃まで草取りをしたが、手が回ればその間に何回でも草取りは行われた。

肥料は昭和初期には豆かすや人糞尿を使用した。人糞尿は溜め桶に担いで田畑に持って行き、撒いたという。その後、肥料はムラで購入し、組ごとに分配していた。

稲干場^{ハザ}作りは稲刈りに先行して9月上旬から中旬にかけて行われる。ハザにはタモギハザとツクリハザがあった。タモギハザは田の近くにあるタモの木々に竹を横に渡したもので、頑丈であったという。一方、ツクリハザは材木を個人で買い、縄を張って作ったもので、強度はあまりなかった。

稲刈りは9月下旬～11月下旬ないし12月上旬頃まで行い、雪や霰を見ることもあったという。ワセは9月末に、ナカテは10月末に、オクテは11月末に収穫した。板カンジキ⁹を履いて行ったが、水が多い場合には6寸から1尺程の高さの箱カンジキや舟に乗ってカマに柄を付けて根元から刈り取る乗刈^{のりがり}を行った。稲刈りの日は、数日前にムラが全戸にフレを回し、窪んだ所を舟を通す舟道^{ふなみちかり}にするために、そこにある稲を刈る舟道刈をした。田んぼから舟道までは、硬い田は押し出しソリで、そうでない田は小型の押し出し舟に稲を積んで押して運んだ。刈り取った稲は40束から50束程積むことができた。稲刈りにはユイを頼むこともあった。

稲刈り後は、田から舟やソリで稲束を運びハザかけを行う。ハザかけは10月中旬から11月末にかけて行われる。ハザかけが11月29日の神迎えまでに終われば上出来であった。ハザは使い終わったら家の梁の上に収納したという。

脱穀調整はワセ、ナカテ、オクテが順に収穫されるのと並行して、11月から12月にかけて行われた。イネをコキあげると、キネでモミのイガを叩く。それをモミトオシに通して、粃殻を天気のいい日にホクズダテした。これを塘箕にかけてあおり、3～4人で土臼を使ってウスヒキをする。次に目の粗いセンゴクから細かいセンゴクへ順に通し、再び塘箕にかけてあおって俵に詰めた。

農閑期には米搗きや客土を行う。米搗きは、隣やシンルイの若い者がユイをし合って行った。臼は2斗入りか1斗7升入りが主で、夜に暗くなってから搗き始める。ケヤキでできた重いキネで、1人で5臼程搗いたという。米を搗き上げると餅を搗き、餅と酒を振る舞ったという。また米はネズミに食われないように6尺四方の箱に1年分の米を入れ、各家の土蔵で保管した。

表1は聞き書きによって明らかにした、遠藤における昭和20年代の1年間の生業暦である。

表1. 遠藤における昭和20年代の生業暦

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
稲作	米つき	密土	アゼヌリ	苗代押し、スジまき 田打ち	クロキリ	田植え	イテバグサ ニバグサ	サンバグサ クロキリ	稲刈り	ハザかけ	脱穀	調整
畑作		ジャガイモ(植え)	ゴボウ(植え)	麦(サくる)	サトイモ(植え)	ニンジン(植え)	ダイコン(植え)				ダイコン(収穫)	ニンジン(収穫) ゴボウ(収穫)
副業	依羅み・ソウナフ編み											
潟の生業				レンコン掘り			ヒシ掘り				ヨシ刈り	
年中行事	年取り(31日)	田植神事(14日) マイ玉飾り(14日) マイ玉外し(20日)		節句(3日)	春祭り(1日) 苗代祭り(1日)	節句・サナブリ(5日)	キンヌキ祭日(1日)	盆子エ(16～20日)	秋祭り(15日)	節句(9日) 田の神送り(29日)	田の神上り(16日) 神迎え(29日)	報恩講(23～29日)

(出所) 聞き書きにより筆者作成。

3 稲作儀礼の流れ

ここでは稲作儀礼を前出の分類に従って大きく予祝儀礼、播種儀礼、田植え儀礼、成育儀礼、収穫儀礼の5つに分類し、遠藤における稲作儀礼の流れを概観する¹⁰⁾

(1) 予祝儀礼

予祝儀礼とは、実際の稲作に先立ち、作物の豊作を祝って豊穰を祈念する儀礼を指し、種籾の保存期間の年初めから小正月前後を中心に執り行われることが多い。

遠藤における小正月は旧暦2月15日から17日であり、この頃から種々の稲作儀礼が行われ始めていた。

田植神事（オタウエ）

2月14日には、田植神事が行われる。

田植神事とはオタウエとも呼ばれ、まず集落の共有田（神田）でムラの行事として共有田の中心にヤナギの枝を挿す儀礼が行われる。共有田には前年の10月29日に行われる田の神送りの際、社殿に祀る種籾俵に挿したヤナギの枝が使用された。次に各家でヤナギの枝を苗代田の中心に挿す儀礼が行われる。このとき使用するヤナギの枝は、前年の11月16日に行われる田の神上り^{あが}で俵に挿していた枝である。

マイ玉飾り・マイ玉外し

また、田植神事と同日の2月14日に、田植えを意味するとされているマイ玉飾りも行われる。マイ玉は、うるち米を粉にしてこねて繭の形に作り、ヤナギの枝にたくさん付けて小正月の間に各イエの神棚の前に飾られる。20日には稲刈りを意味するとされるマイ玉外しが行われ、枝から外したマイ玉を焼いて食べた。

(2) 播種儀礼

播種儀礼とは、苗代への播種に際して行われる儀礼である。次項の田植え儀礼ともに実際の農耕に沿って展開し、田の神を迎える。遠藤においても田の神迎え・苗代祭り¹¹⁾が行われていた。

田の神迎え

春に種籾を苗代に播く時には、苗代田のある小字前田より高い土地である小諏訪や大諏訪から用水を入れるために、ムラ役人とオモダチを中心にした人々が集まり、高地の田のミズモチアゼにヤナギの枝を諏訪神明社の宮司が2本挿し、祝詞をあげるなどしてムラでその年の豊作を祈願した。かつて5月1日に行われたこの儀礼に特別な名称はないが、このとき使用されるヤナギの枝には田の神が降りてくると言われている。ここでは、この一連の儀礼を便宜上「田

の神迎え」と称することとする¹²⁾。その後、2本のヤナギの間をミズモチアゼをムラ主体で鋤を使用して壊し、そこから高低差を利用して溜めてある水を次々と苗代田へ流していた。このときの用水の調整や個々の苗代田への配水は、ムラの水廻人1名が管理する。使用される鋤は三本鋤で、ムラ役人とオモダチが儀礼の一週間ほど前に諏訪神明社¹³⁾の宮司にお祓いをしてもらった後、当日まで神前に供えておいたものを使用する。

また、このヤナギの枝は儀礼の後しばらくはその場所に挿したままにしておくが、全ての苗代田へ用水が流されたことを確認した翌日頃に、集落の共有田（神田）にムラ役人とオモダチが持って行き、その中心に挿したという。

ミズモチアゼは、昭和26年の耕地整理まで存在したが、その後は大規模な圃場整備によってその姿はなくなった。この田の神迎えの儀礼もそれに準じて行われなくなったが、この苗代田へ用水を入れる時期の新暦4月1日は諏訪神明社の春祭りとして、現在もムラの行事として行われている。

苗代祭り

遠藤ではこのムラ主体の稲作儀礼とは別に、各イエでも個別に稲作儀礼が行われていた。

そのうちの一つが苗代祭りである。遠藤における苗代祭りとは、各イエ所有の苗代田の中央にヤナギの枝を挿して豊作を願う稲作儀礼である。これは前述したミズモチアゼでのムラの儀礼終了後すぐに各イエで行われる。種籾を苗代田に播いた後に行われる儀礼である。田の中心にヤナギの枝を挿し、これに^{かんな}鉋クズを付けて鳥除けとする。ヤナギの枝の周辺には焼いたヨシを円形に何本も挿し、イエの住人が豊作を祈願した。

(3) 田植え儀礼

田植え儀礼とは、前項の播種儀礼同様実際の農耕に沿って展開するが、特に田植えを中心に田の神を迎え、送るといふ儀礼が行われる。遠藤においても田植え開始時にはサオリ、田植え終了時にはサナブリの儀礼が行われていた。

サオリ

遠藤では、田植えがムラで時期を合わせて5月下旬から6月初旬にいつせいにされる。

サオリの儀礼は、田植え開始前にミズモチアゼに諏訪神明社の宮司がヤナギの枝を挿し、その下へ苗を三把供えて祝詞をあげるものであった。この儀礼はムラで行うものであって、各イエ個別の事例はない。このとき苗が供えられ、ヤナギの枝が挿されるミズモチアゼとは、共有田（神田）のミズモチアゼであった。サオリで供えられた苗三把は、共有田へ若い女性によって植えられたという。

サナブリ

旧暦の6月5日頃には、田植えが終盤を迎える。田植え終了後には共有田（神田）のミズモチアゼに諏訪神明社の宮司がヤナギの枝の下へ苗を三把供え、祝詞をあげた。このときヤナギ

の枝はすでにサオリの時点で挿したままのものであり、特段挿す位置を変更したり新たな枝に変えたりすることはなかった。ムラ全戸の田植えが無事に終わると、節句と合わせてムラの農休みのサナブリ休みとなる。

サナブリは、各イエでも神棚にイエの主人が苗三把とヤナギの枝を供え、餅やご馳走を食べた。イエのサナブリで供えられるのは、各イエの田植えで残しておいた苗三把と、イエの行事である苗代祭りで使用されたヤナギの枝であった。

（4）成育儀礼

成育儀礼とは、稲の無事な成育を願う儀礼である。しかしながら、遠藤においてはこの成育儀礼は見られなかった。虫送りや雨乞い、風まつりなどの代表的な成育儀礼は存在しなかった。

（5）収穫儀礼

収穫儀礼は稲刈りから脱穀・調整にかけて行われる儀礼で、秋の年中行事や祭礼に分化・融合していることが多い。遠藤では、多くの地域と共通して田の神を送る収穫儀礼が存在したが、これにはムラとイエという単位それぞれで行うものであった。この時のムラの儀礼を「田の神送り」、イエの儀礼を「田の神上り^{あが}」と称していた。

田の神送り

田の神送りとは、旧暦 10 月 29 日にムラで行われる儀礼である。この日の朝、子どもたちが「田の神送りするから志あげてくらしゃい」と言いながらムラの各戸を回る。各戸からは米や金銭などが集められ、ムラからは御神酒とお明し（灯籠^{あか}）が用意される。諏訪神明社の大門（鳥居）に竹と縄で神の通路を作る。女兒と男児が 1 名ずつそれぞれ「神明宮おわかれ候」、「諏訪宮おわかれ候」の札を背負い、後ろを振り向かず裸足で通路からムラの外れまで走る。ムラの外れには川へとつながるセキ（堰＝用水路のこと）があり、ヤナギの枝が挿してある。ここへ御神酒とお札、お明かしを藁で作った舟に乗せて流し、見えなくなるまで見送る。このセキとは、用水を引いたり排水を行ったりするための用水路を指し、セキの周辺は泥土で造られていた。遠藤には 3～4 つのセキが存在していた。この神送りで使用されるセキはそのうちのひとつであり、遠藤ムラの中では「一ノ堰」と呼ばれていた。

田の神を送った後、共有田（神田）から収穫した米、セキに挿したヤナギの枝を挿した種粃俵を社殿に祀った。

田の神上り

田の神上り^{あが}とは、月遅れの 11 月 16 日に各イエで行われる儀礼である。この日、田の神は笠を被って「オーサブ オーサブ」と言いながら田からイエ、そしてその後ヤマへ上られると伝わる。各イエでは、神棚と種粃の入った俵の上に餅、収穫物、酒などを供える。俵の下には筵

を敷き、1本のヤナギの枝を挿す（もしくは供える）。このヤナギの枝は、年明け後の2月14日に行われる田植神事で使用される。俵は儀礼後、土間の天井に保管した。

4 考察

(1) ムラの儀礼とイエの儀礼

本稿で取り上げた田の神をめぐる儀礼の順序に注目すると、まずはじめに気が付くのがムラの儀礼からイエの儀礼へ、と行われる儀礼の展開と連続性である。

田植神事（オタウエ）の儀礼からは、田の神をムラの共有田へ降ろした後、各イエの苗代田へ田の神を降ろすという展開が明らかになる。また田の神迎えと苗代祭りの2つの儀礼からは、ミズモチアゼを壊して苗代田へ用水を流し、そのヤナギの枝を共有田に挿すことでムラとしての田の神迎えが完了すると、次の段階として苗代播種を行い、共有地から採取してきたヤナギの枝を各イエで苗代田に挿して儀礼を行うことで、ムラに迎えた田の神を、観念的に各イエの苗代田に迎えるという展開が見られるのである。さらに田の神送りと田の神上りの2つの儀礼からも、ムラとして田の神を送った後、各イエの稲刈りを全て終えてからイエで田の神を送る。

ここではイエでのみ行われるマイ玉飾り・マイ玉外しは除外されるが、その他の儀礼ではイエの儀礼に先んじて、ムラとして共同で田の神に対する儀礼を執り行っていたのである。

これには第2章1節で述べたように、遠藤での稲作が常に深刻な用水不足に直面していたことに深く関わっていると考えられる。つまり、本来私有地である苗代田における苗代水の貯水と利用は、ムラの共同で行われるという形態の下で耕作されねばならなかったし、その苗代水を溜めるアゼの共有も常に確認される必要があったのである。アゼヌリはムラの共同作業として行われ、労働面において果たされていたその共同の意識は、いくつかの稲作儀礼においても、ムラの儀礼を行ってからイエの儀礼が行われることで心的な側面でも発露し、生活と儀礼の両方で相似形をなしていたのである。

(2) 媒体としてのヤナギと田の神

遠藤の稲作儀礼の媒体となるのがヤナギの枝である。表2にはヤナギの枝の移動について、それぞれの流れを同一アルファベット（A、BおよびC）で、なお使用するヤナギの枝の別も表した（A・A'、B・B'およびC・C'）。ここからは、遠藤の稲作儀礼において常にヤナギの枝が用いられていること、そしてそれには田の神の表象としての役割が込められていたことが明らかとなる。

表 2. 遠藤における田の神をめぐる稲作儀礼

名称	儀礼日付	主な場所	儀礼主体	祀られる対象	ヤナギの枝の移動
田植神事（オタウエ）	2月14日	共有田（神田）	ムラ	イナガミ（稲神）	A ←
	2月14日	各イエの苗代田	イエ	イナガミ（稲神）	A' ←
マイ玉飾り	2月14日	各イエ	イエ	—	B
マイ玉外し	2月20日	各イエ	イエ	—	B
田の神降り	5月1日	ミズモチアゼ	ムラ	田の神	C ●
苗代祭り	5月1日	各イエの苗代田	イエ	田の神	C' ●
サオリ	5月下旬～ 6月初旬	ミズモチアゼ	ムラ	田の神	C ←
サナブリ	6月5日頃	ミズモチアゼ	ムラ	田の神	C ←
	6月5日頃	各イエの神棚	イエ	田の神	C' ←
田の神送り	10月29日	セキ（ミズモチアゼ）	ムラ	田の神/ イナガミ（稲神）	A ●
田の神上り	11月16日	各イエ	イエ	田の神/ イナガミ（稲神）	A' ●

（出所）聞き書きにより筆者作成。

さらにヤナギの枝の移動に注目すると、そこからは2つの大きな流れが読み取れる。一つは田の神送り・田の神上がりから田植神事（オタウエ）までの儀礼展開、そしてもう一つは田の神迎え・苗代祭りからサナブリまでの儀礼展開である。田の神送り・田の神上りで俵に挿されたヤナギの枝は、それぞれ翌年のムラとイエの田植神事に使用され、田の神迎え・苗代祭りで使用されたヤナギはそれぞれムラのサオリ、ムラとイエのサナブリで使用される。つまり、サナブリと田の神送り・田の神上りの間（C群—A群）で、ヤナギの連続性が途切れるのである。

特に、田の神送り・田の神上がりから田植神事（オタウエ）までの儀礼展開に注目すると、このときのヤナギの枝の移動には、以下で述べる当該地域の田の神の性格がよく表れている。

まず遠藤では、田の神がヤマから降り、ヤマへ上っていくと伝承され¹⁴⁾、その去来神としての性格が顕著である。このときのヤマとは、具体的な名称を持つ山ではなく、ヤナギを採取するムラはずれの共有地周辺を指す。遠藤では耕地のほとんどが強湿田であったために、前述の通り、田を区画する際の標示としてサカイヤナギ、田植えをする際に目印とする再見竿^{サイミサン}など、生活においてヤナギの枝がたびたび使用されていた。現在の遠藤は5つのムラ組に分かれており、このうちのひとつである山中組^{やまなか}は、遠藤のはずれに位置する。昔はムラはずれの離れた田（上田や前田などの、比較的標高が高い田）へ行くことを「ヤマに行く」といったので、田の中にまとまっているこの集落を山中組と呼ぶようになったともいい、ここからヤマ＝ムラはずれの共有地周辺、という伝承が確認できる。図2は昭和23（1948）年に遠藤上空で撮影された空中写真である。円形で囲まれている周辺が共有地であり、儀礼における全てのヤナギの枝はここから採取されていた。

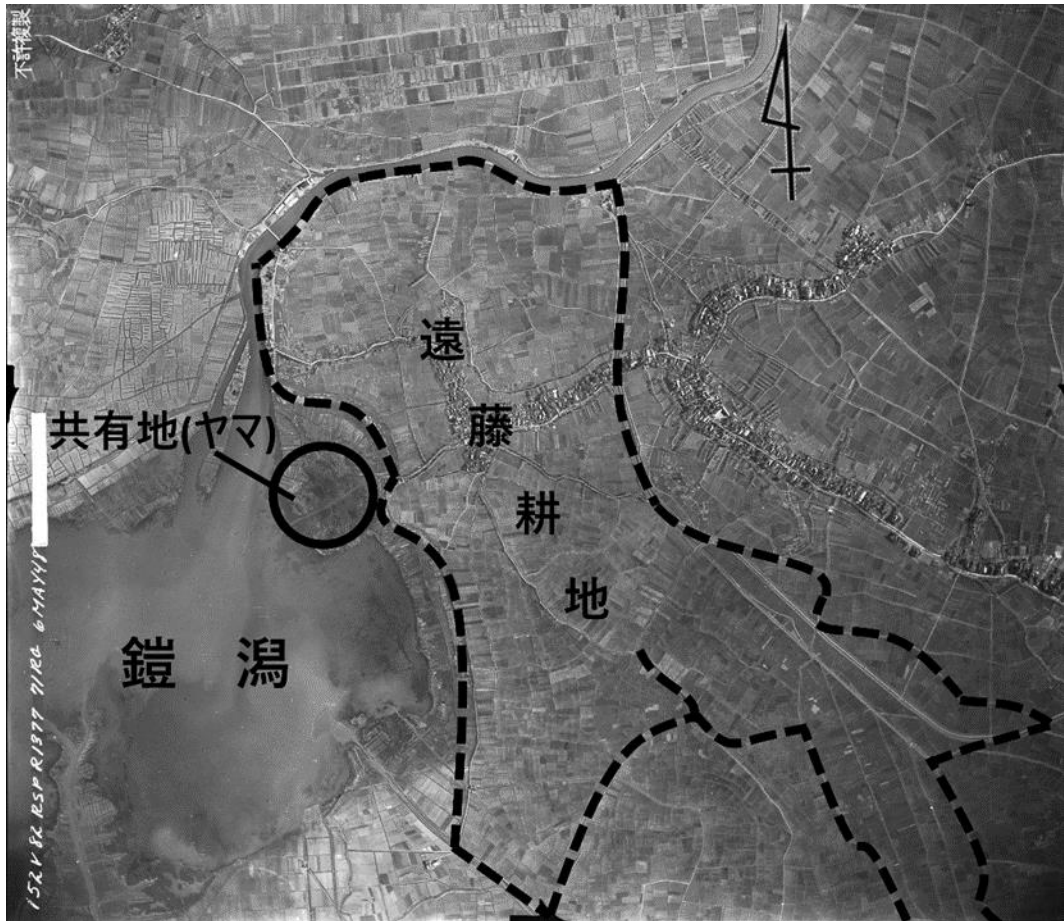


図2. 昭和20年代の遠藤上空の空中写真

(出所) 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス 整理番号：USA-R1377-152

撮影年月日:昭和23(1948)年5月6日 より引用し聞き書きをもとに筆者が記入して作成。

次に、俵に挿したヤナギの意味、あるいは年明け後の田植神事で苗代田へヤナギを挿すのはなぜかを探るとき、遠藤の人々は田の神の一部が残って種籾の入った俵に宿ると説明する。地域でこの状態の田の神を表す呼び名はあまり聞かれないが、しいて言うならイナガミ(稲神)と呼ばれる。

ここで改めて、本稿における田の神とイナガミ(稲神)の概念を簡単に整理しておきたい。遠藤における田の神とは、従来指摘されてきた通り「稲作の豊穰を祈り祭る神」(柳田1951:357)「稲を守り稲作の豊穰をもたらす神」(大塚民俗学会 1972:433)といった稲の外にある農神と定義したい。一方で、イナガミとは「稲そのものの精霊」(大塚民俗学会編 1972:)であり、稲に宿り、実りをもたらす「穀霊」(福田ほか 2000:617)の性格を持つ。

つまり、遠藤における田の神には、ヤマから降り、種々の儀礼を通じて家や田を往来し、田の神の一部が残って種粃を納めた俵を介在することでイナガミの要素を帯び、俵に宿らない田の神はヤマへ上っていく、という複合的な性格や分化が見られるのである¹⁵⁾。またこの田の神の表象は常にヤナギの枝であり、このヤナギの枝に種粃俵が付随する越冬期が重要な契機となる¹⁶⁾。そしてこの状態のイナガミを田植神事で苗代田へ降ろすことで豊作を祈願し、かつヤマから降りてきた田の神がイナガミと融合することで、完全な田の神になるとされる¹⁷⁾。

5 結論—ミズモチアゼとヤナギがもたらす儀礼—

本稿の目的は、恩恵と災厄が隣り合う低湿地の生活の中で、そこに暮らす人々がいかにしてそれらを受けとめてきたのかを明らかにすることであった。そこで本稿では、当該地域での田の神をめぐる稲作儀礼に注目して検討することで、以下のことを明らかにした。

第一に、遠藤集落における田の神をめぐる儀礼では、その順序に注目すると、ムラの儀礼からイエの儀礼へ、という儀礼の展開と連続性が見られた。そしてこの稲作儀礼は、この地で稲作に従事するうえで欠かせないミズモチアゼやヤナギに依拠していたことが明らかとなった。

さらに第二に、遠藤における稲作儀礼で田の神は常にヤナギの枝で表象され、このヤナギの枝の移動に注目すると、田の神は共有地周辺を指すヤマを起点に去来神的性格を有するという伝承が明らかになった。

従来、当該地域の稲作儀礼に関する詳細な報告はほとんどなく、儀礼や信仰に対しての意識が希薄であったという印象が根付いていた。しかしながら、その実、本稿で挙げた事例のように、田の神の去来信仰と稲作儀礼はこの地域に根付き、そしてこれらは湿田特有のアゼの形態や利水・配水状況に裏打ちされていた。遠藤の人々は田の神が身近に存在すると信じ、例年の豊作を祈った強い信仰心が窺える。

浸水の被害に気を配りながら、一年を通して田の保全に関して割く労力や心労は、相当なものであただろう。浸水すれば即刻食糧難や財政難に陥る厳しい現実に直面する一方で、田の神に関してはムラ・イエともにこまめに稲作儀礼を行い、そこからは遠藤の人々が田の神を身近に信じ、その庇護による例年の豊作を祈った強い信仰心が窺える。

厳しい現実に反射するかのような田の神に限った篤い信仰心が存在するというこの様相こそが、低湿地に暮らす人々の中に培われた心性であった。

<注>

1) 例えば、金塚友之丞（1970）や地理学の野間晴雄（1979）は、新潟県西蒲原一帯を調査し、生業を中心とした民俗、田の形状や境などの湿田における多くの農耕技術を報告した。最近では、新潟市歴史博物

館（2012）などで西蒲原の開墾について考古学から民俗学まで幅広く学際的な研究がなされている。また菅豊（2003）は新潟県西蒲原におけるホリアゲタの発生と活用を新田開発が多く行われた近世期に遡り、その工法には水田開発型と水田安定型の2つがあるとして、積極的な「水辺」の開拓の様相を明らかにした。

2) 野本寛一（1993）77頁を参照のこと。

3) 安室知（1998）は、水田畦畔のほとんどに豆が栽培されており、このときの畦畔はアゼとハバに区別され、アゼにはダイズを、ハバにはアズキを栽培するという区別がなされているという。これらは自給的生活を送る上で重要な副食料である一方で、女性と子どもの労働力に頼る部分が大きいため労働力不足の際には最も先に省略される傾向にあったことを報告している。

4) サカイヤナギは我々の考える一般的なアゼの概念とは多少かけ離れるかもしれないが、現地では「水田の区画を分け、所有の最小単位を明示」しており、この点でアゼの分類に入れてよいとここでは判断した。

5) ここでいうヤナギとは、吉原正秀・西山邦夫ら（1968）による昭和34年の鎧潟干拓着手に伴う植物相調査によれば、ヤナギ科のアカメヤナギ、オオネコヤナギ、ネコヤナギ、イヌコリヤナギ、タチヤナギのいずれかと考えられる。このうち儀礼で使用されていた可能性が高いのは、その植生の様子からアカメヤナギ、イヌコリヤナギ、タチヤナギの三種である。

6) ここまで、遠藤を「低湿地」村落としてきたが、そもそも「低湿地」という空間や語は、その定義がはっきりとしていない。「湿地：河川・湖沼の近辺などで、地下水が地表に近く、水けの多いじめじめした土地」（新村出編、1998）とか「低湿：土地が低くて湿気の多いさま」という語が辞典に見られるものの、「低湿地そのものは、現状では述語とはいえない」（籠瀬、1976）のである。「低湿地」の範囲を具体的にどこまで拡大するかは、今後の課題である。

7) その後、大正8（1919）年の県営新川改修工事（昭和10年完成）、大正15（1926）年の大河津分水（新信濃川）の通水によって西蒲原の村落では乾田化が進展するが、遠藤では新川改修等によって渇水期の水不足が深刻となったので、昭和5（1930）年に遠藤揚水機組合を組織して用水の引き入れを図った。昭和3（1928）年頃には、五ヶ村下江用水へ加入し、昭和8（1933）年には木山川改修工事に伴う同用水新設水路のための用地提供の条件として遠藤耕地専用の用水路設置を要求した。この要求は先延ばしにされたが、不満を募らせた遠藤の住民が請負事務所等へ押しかけ抗議した結果、大字上大原・大字下大原・大字遠藤および新川疏水普通水利組合の間で「協定書」が結ばれ、五ヶ村下江用水を500間程延長することで要望した用水路（大原下ヶ江）が設置されることとなった。しかしこの「協定書」には遠藤に対して厳しい規制も記載されており、用排水の問題が完全に解決することはなかった。昭和28（1953）年には揚水機設置に伴って旧木山川堰堤から人工揚水へ転換し、昭和33（1958）年には新川疏水普通水利組合による請願を受けて鎧潟干拓が着手され、昭和41（1966）年に干拓が完了した。

8) 米に大根や菜っ葉を入れ炊いた飯のこと。菜っ葉はイエの畑で作ったものや潟にある菱の葉も入れた。

9) 製材した木材を組み合わせて作成した履物で、主に稲刈りで使用された。ヒラカンジキ、ムカデカンジキともいう。杉材が多く、複数の細長い板（40cm程）5本を藁で綯った紐で隙間なくつなげた形状である。

10) 倉田一郎（1969）は、農神の祭日について、予祝儀礼とは別に、田の神降り・苗代祭り・初田植（サオリ）・田植終（サノボリ）・田の神送りという5つの節目を設定しているが、本稿では後の分析の際に、田の神の神格変化等の様相が予祝儀礼をも含めた一連の儀礼展開で読み取れることから、この分類を用いる。

11) 苗代祭りとは稲作儀礼の一つで、主に種籾を苗代に播いたときに家ごとに行われる祭りである。苗代田の水口、あるいはこの田の畦畔や中央に柳などの木の枝や季節の花、小正月に作った飾りを挿し、焼米や洗米を供えることが多い。この苗代田に挿す木の枝や花などは、鳥や災害を避けるためのものともされるが、田の神の宿り木や依代、あるいは田の神そのものとして祀る地域もある。

12) 地域ではこの儀礼で「田の神が降りる」と言うが、後の「田の神送り」との整合性や儀礼の主体を人間側に置くため、ここでは「田の神迎え」とした。

13) 遠藤の神社はかつて諏訪社、神明社の二社があったが、大正15（1926）年に諏訪社が神明社に合祀され、現在は諏訪神明社となっている。

14) 遠藤において田の神はヤマから降り、ヤマへ上っていくと伝承されているが、そこから田の神＝山の神とは必ずしも言うことはできない。遠藤の周辺環境や生活で、山との関係は希薄である。儀礼やその口上などでも山との関係は窺えない。

15) しかしながら、遠藤においてはこの田の神の分化・融合はあくまで現地の民俗的解釈に過ぎず、地域の人々も神送りや神迎えの重複・矛盾をあまり認識していない。ムラやイエで扱う田の神についても、

その神格は異なる可能性がある。田の神の性格変化については、より精緻な分析が必要と考え、稿を改めたい。

16) 藤原（1996）はアエノコトを事例に、田の神の表象を稲穀とする場合には家と田の移動がみられ、抽象的な田の神の場合には山と田への移動伝承がみられるとした。また、こうしたヤナギの枝や種籾俵による田の神の表象や性格変化に関しては、藤原のアエノコトにおける若木迎えの分析に近いものがある。藤原は冬のアエノコトと春のアエノコトの間には越冬期間＝田の神の性格転換が起こりうる期間があるとし、その象徴が若木を種籾俵に立てることであるとする。そして若木を立てるのは春のアエノコトに多いことから、田の神は春のアエノコトにおいて収穫を祈願し得る新しい対象としてアエノコトに出現する、つまりその転換の象徴的表現が若木である、としている。藤原はここでアエノコト伝承地帯における田の神の複合的性格を指摘しているが、遠藤におけるそれは、田の神の一部が分化し種籾俵へ残されたうえで性格変化を起こす点で、藤原の扱ったアエノコトにおける田の神の性格変化とは異なると考えられる。

17) ここで注意したいのが、遠藤におけるイナガミはあくまで田の神から一時的に分化し、時期が来ればその本体と融合し得る存在という点である。つまり、厳密には田の神≠稲の神であるが、遠藤においては限りなく田の神≒稲の神、として地域の人々は捉えている可能性がある。

<引用文献>

伊藤幹治 1974、『稲作儀礼の研究―日琉同祖論の再検討―』、而立書房

大塚民俗学会編 1972、『日本民俗事典』、弘文堂

籠瀬良明 1976、『低湿地―その開発と変容―』、古今書院

金塚友之丞 1970、『蒲原の民俗』、野島出版

倉田一郎 1969、『農と民俗学』、岩崎美術社

菅豊 2003、『「水辺」の開拓史―近世中期における堀り上げ水田工法の発展とその要因―』、『国立歴史民俗博物館研究報告』第105集、pp.357-379

新潟市歴史博物館 2012、『平成24年度企画展「開墾の技術史―蒲原平野のたんぼとはたけ―」図録』

新村出編 1998、『広辞苑 第五版』、岩波書店

農林大臣官房総合開発室編 1952、『水田二毛作化に関する総合的研究』、農林省大臣官房総合開発室

野間晴雄 1979、「蒲原平野における小農の湿地農耕技術―西蒲原郡遠藤のモノグラフから―」、『奈良大学紀要』第8号、pp.60-76

野本寛一 1993、『稲作民俗文化論』、雄山閣出版

福田アジオ他 2000、『日本民俗大辞典 上・下』、吉川弘文館

藤原修 1996、『田の神・稲の神・年神』、岩田書院

安室知 1998、『水田をめぐる民俗学的研究』、慶友社

柳田國男監修 1951、『民俗学辞典』、東京堂出版

吉原正秀・西山邦夫 1968、「新潟県澁瀨の植物」、『長岡市立科学博物館研究報告』第5号、pp.1-13

国土地理院 HP、地図・空中写真閲覧サービス (<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>、最終アクセス：2017年1月16日)

主指導教員（飯島康夫准教授）、副指導教員（佐藤康行教授・堀健彦准教授）